書 評

木村周平.『震災の公共人類学―揺れとともに生きるトルコの人びと』世界思想社，2013年，312 p.

市野澤潤平 *

本書は，「震災の」人類学と銘打ちながら，地面が揺れたその瞬間，および直後の混乱と悲劇を，描き出そうとするものではない．本書の舞台であるトルコは，震災に繰り返し見舞われ続けてきた．近年では，1999年に生じたふたつの大地震により，合わせて2万人近い犠牲者を出した．著者が本書に結実する調査を開始したのは，それらの悲劇から5年を経た2004年である．また，主たる調査地として選んだのは，地震による被害が顕著であったコジャエリまたはデュズジェではなく，その隣県にあたり，1999年の地震を引き起こした「北アナトリア断層」の西端に位置する，世界有数の巨大都市イスタンブルである．

将来的に大きな地震に襲われる可能性が高いとされるイスタンブルの調査を通じて著者が描き出そうとするのは，狭義の〈震災〉―地震による物理的な衝撃（およびその直接的な帰結としての〈被害〉）―ではなく，〈地震の後〉であり，〈地震の前〉であり，〈地震の周辺〉である．「近い過去に起きた地震と，近い将来に起きると言われている地震の間」（p. 3）に焦点を定めることにより，本書は問わず語りのうちに，震災（そして災害一般）を優れて長期的，複合的，広域的な過程として捉える視野を，著者が目指す「震災の公共人類学」の基底条件として，提示する．ゆえに本書の記述は，参与的な調査に立脚した細密な描写を基盤としつつも，100年以上のタイムスパンと，日本を含めた複数の場所を，縦横に移動する．イスタンブルで見聞きした出来事が題材である（またときに〈トルコ的な〉価値観や意味世界への言及がある）にも拘らず，いわゆる〈民族誌的な〉テイストが本書には希薄であると，読者は感じるかもしれない．そうした本書の性格は，ひとつには上記のような震災の捉え方ゆえであり，もうひとつには，震災を描こうとするうえでの著者の特徴的な態度に，起因している．

本書は，「揺れとともに生きるトルコの人びと」という副題をもちながら，単に〈トルコ（人にとって）の震災〉を描写説明しているのではない．著者は，「彼ら・彼女らは私たちと同じ問題に取り組む者たちなのであり，その経験を通じて／とともに考えられることは少なくないはずである」（P. 14）という．つまり，「彼ら・彼女ら」の物語としてではなく，著者と読者も含めた〈われわれ〉の物語として，トルコの震災を〈われわれ〉の日常世界へと連なる広がりをもって描くこと．その営為を通じて，「世界の様々な場所で，災害とともに生きる人びと同士を，さらにそうした人びと，今後現われてくるであろう災害に関する人類学的な研究や実践をつなぐ助けとなること」（p. 14）．それが本書の目指すところである．

* 宮城学院女子大学国際文化学科

震災を研究テーマとしてきた著者は，「いますでに起きつつある災害に対して，物理的に状況を改善することに貢献」（p. 13）する術をもたない〈傍観者〉として調査対象に関ることの倫理的意味を，徹底的に問わざるを得なかったはずだ．自身が〈傍観者〉にすぎないという事実から逃げださずに留まることを選んだ著者による苦闘の成果である本書は，応用的なスタイル―問題点をあぶり出すこと，批判すること，改善への具体的な提言をすること―から距離を置きつつ人類学の内と外をつなごうとする，意欲的かつ挑戦的な試みともなっている．

〈傍観者〉でありながらも無為への撤退を拒む著者が，自らの立場を位置付けるための概念的なよりどころが，「公共性」である．序章では，ハンナ・アレントの議論に依拠しながら，公共性の概念が整理される．著者のまとめによれば，アレントの「議論における公共的な領域とは，相異なる多数の人びとによって構成される領域」（p. 12）という幅広い意味において捉えられるものであり，ハーバーマスが着目するような政治的文脈，すなわち公の場での議論を通じた合意形成であるとか，公権力に対する市民の抵抗といった側面は，成立の必要条件とはされない．アレント的な意味での公共性を特徴付けるのは，「開かれ」「多数性」「持続性」という 3 つの要素（p. 32）であり，それらが成り立つところに必然的に生じてくる，人びとのつながり，複雑な諸実践，新たな意味の生成，といったことが，著者が捉えていきたい現象であるとされる．

というといささか漠然としているようだが，著者は「はじめに」において，①災害における公共性，②トルコにおける公共性，③人類学における公共性，という 3 つの切り口を提示することによって，公共性をめぐる本書の議論に輪郭を与えている．本論部分は，3 部構成（各部はそれぞれ 2 つの章を含む）となっている．各部のテーマは，第 I 部が「人びとの間を流れ，人びとを結びつけたり，引き離したりするものとしての記憶や情報」（p. 254），第 II 部が「時間性」（p. 256），第 III 部が「より積極的に，地震とともに生きる生のあり方」（p. 257），である．各部においては，いわば縦糸である各々のテーマに，3 本の横糸，すなわち公共性をめぐる 3 つの切り口が織り込まれる形で，議論が展開されていく．

第 I 部の第 1 章では，1999 年の震災の記憶がいかにして共有されていくのか，が論じられる．そこで着目されるのは，多数の犠牲者を出したコジャエリに建てられた記念碑である．それが発している，忘れないでいよう，という強烈なメッセージには，奇妙なことに「誰が・何を」忘れないのかについての情報が，欠落している．その欠落を，著者は肯定的に捉える．「誰か・何か」は，明示されないがゆえに，協働的に創り出される（ことができる）ものとなり，固定された記憶が不可避的に被る限定や風化を免れる可能性を，拓くのだという．

第 2 章では，地震観測所を舞台として，地震に関する「科学的」知識が生産される様が描かれる．たとえばマグニチュードの数値

などの形で明瞭・簡潔に切り揃えられた科学的知識や情報は，観測・分析者たちと観測機械などの諸装置とが複雑に関り合うなかで創り出された結果であるのみならず，そうした関り（およびその連なりとしてのネットワーク）そのものを生み出す母胎でもある．また，それらの知識は，人びとの日常的なコミュニケーションを通して一般に流通していくが，その過程で，ときにノイズをまとい，創造的な解釈の余地を残す．それが結果として，立場を異にするアクター間における議論や理解の集いといった，つながりの実践を呼び起こしていく．

第Ⅱ部第 3 章では，トルコにおける地震学と防災政策の，100 年を超える歴史が概観される．また第 4 章では，著者が観察した，イスタンブルの特定地区における，耐震再開発プロジェクトの顚末が描写される．第Ⅱ部では，マクロとミクロの時間の流れが対比されながら，地震をめぐって現在から過去と未来を見通すうえでの，避けようのない不確実さが強調される．何が起こった／起こるのか，だから何をすればよいのか，という国家や社会のレベルで総論的に共有される問いは，その答えを見いだす局面では，関る者の立場や視点に応じて無数の異なる各論を生み出す．そして事態は不安定となり，膠着したり不首尾に終わったりといった歓迎されない帰結に至ることもあるが，一方では，その不安定さゆえに変化に開かれ，アクター間の新たな関りを生み出す可能性を残す．

第Ⅲ部第 5 章では，ボランティア活動が論じられる．阪神淡路大震災時の日本と同様に，トルコにおいても 1999 年の震災に端を発して，被災者／地援助や防災のボランティア活動が興隆した．それは被災者の（ときに声にならない）呼びかけへの応答として生じた動きであり，また自らが呼びかけの主体となって，親族・友人・同僚といった従来的な関係の枠組みにとどまらない，「個々人のプライベートな関心を越えて社会的な問題に取り組もうとする際の，人びとの関わり方の様式」（p. 257）を，新たに構築していく動きでもあるという．第 5 章では，震災がもたらしたそのような創造的な効果が，しかしながら持続という点において深刻な弱さを抱えていることも併せて指摘され，その構造的な問題点が考察される．

第 6 章は，前章を引き継ぐ形で，震災が生み出した新たな関りの持続可能性が，論じられる．被災の衝撃によって燃え上がった熱狂も，喉元過ぎれば忘れられる．しかしそれでもボランティア活動／組織を継続していくための「試行錯誤」として，イスタンブルの防災ボランティアの活動が分析される．著者が事例から見いだした，メンバーによる関心の複数化や，新たなアクターの巻き込みといったさまざまな工夫は，持続性を保証する特効薬とはいえないまでも，日本における同様の問題を考えるうえで，参考になる（私事になるが，書評者も 2011 年以来，学生による災害復興ボランティア活動を展開してきたなかで継続性の問題に直面しており，本章の記述に教えられることが多い）．

結論部では，第 1 章から第 6 章までの議論を振り返ったうえで，トルコと日本を貫通

させる形で，震災における「公共性」の有り様が，考察される．そこで手がかりとされるのが，「絆」や「緩やかなつながり」という，東日本大震災後の日本において広く流通したキーワードである．強固な同質性を要求する「絆」と，各自の異なる志向関心へと分解しかねない「緩やかなつながり」．その二極の中間にあるものこそが，「本書で「公共性」という名で追い求めてきた関係性」（p. 261）なのだと，著者はいう．そして，「『震災の公共人類学』は，こうした関係性を描き出すと同時に，関係性の一部を目指すものである」（p. 262）と述べる．

本書の特徴は，その極めて抑制的な筆致である．著者は，事例の描写と説明に徹して，いたずらに論を踊らせない．結果として，トルコの震災をめぐる入り組んだ関係性としての「公共性」を多面的に描き出すことには成功しているが，そこからさらに一歩踏み出して公共性という概念をめぐる問題系を開拓していこうという力強さには，欠けるかもしれない（たとえば，「はじめに」で公共性に関る3つの関心を提示しながら，結論部ではそれに呼応した論の展開と整理がみられない）．ただしそれは，各章を「一つのテーマをめぐるストーリーとして読めるように心がけた」（p. 12）という記述からも分かるように，著者が意図的に選択した態度である．その選択は，トルコにおける〈地震と地震の間〉を描こうとしている最中に，期せずして東日本大震災に直面したことと，無縁ではあるまい．敢えて慎重に抑制的に書かれた本書は，著者による「震災の公共人類学」の総括ではなく，その序章に当たるものだと，捉えるべきであろう．深甚なる可能性を秘めた著者の取り組みの，今後の展開に期待したい．

田村慶子．『多民族国家シンガポールの政治と言語―「消滅」した南洋大学の25年』明石書店，2013年，208 p.

鍋倉　聰*

本書は，シンガポールにかつて存在した南洋大学（南大）について，その歴史を中心に行なった研究の成果をまとめたものである．南大は，1956年に当地の華語教育の最高学府として開学した大学で，1980年に「消滅」し，その敷地は現在，南洋理工大学という別の大学になっている．

シンガポールは，リー・クアンユー初代首相率いる人民行動党（PAP）の下で一元管理社会が築かれて久しく，その歴史については，リーが自身の著作や演説等で繰り返し示すような史観が支配的である．本書は，南大について，「先行研究」，「当時の華字新聞と英字新聞，南大同窓会の記念誌や回顧録」，「公文書や関係者のインタビュー資料」といった史資料をもとに研究を進め，こうした史観を再検討する試みだといえる．

本書の内容を以下に記すと，まずその目的は，「はじめに」で示されているとおり，南大の歴史を「政治と言語の葛藤という視点から振り返ること」である．これまで十分に研究が行なわれてこなかった南大について，さ

* 滋賀大学経済学部